

石見

邑智郡神楽ガイドブック

平成14年9月 発行
令和3年7月 第8版発行

【発行】

公益財団法人邑智郡広域振興財団
〒696-0001 島根県邑智郡川本町大字川本332-15
TEL.0855-72-2787

【特別協力】

竹内幸夫

【写真協力】

出羽神楽団(邑南町)
雪田神楽団(邑南町)
市山神友会(江津市桜江町)

【取材協力】

柿田勝郎面工房(浜田市)
神楽ショップくわの木(浜田市)

【撮影】

スタジオフェイス

【編集・制作】

企画&デザイン バウンス

神楽

※本ガイドブック作成にご協力をいただいた竹内幸夫先生は、平成25年1月に逝去されました。



発行

公益財団法人邑智郡広域振興財団
〒696-0001 島根県邑智郡川本町大字川本332-15
TEL.0855-72-2787
<https://www.ohchi-gun.or.jp/>

邑智郡神楽ガイドブック



日本遺産



邑智郡 神楽ガイドブック

ゆうゆう
悠邑ふるさと・おちぐん



公益財団法人邑智郡広域振興財団

●●●掲載の情報は令和3年6月現在のものです。

- フォトエッセイ「神楽の夜」…………… 5
- なるほど石見神楽…………… 11
- スポットライト「異彩を放つ大元神楽」…………… 17
- 石見神楽鑑賞の手引き…………… 21
- 邑智郡神楽情報…………… 35
- 邑智郡 神楽マップ…………… 巻末

石見神楽が日本遺産登録。

島根県西部(石見地域)で伝承される神楽をテーマにしたストーリー「神々や鬼たちが躍動する神話の世界 ～石見地域で伝承される神楽～」が、2019年5月20日に日本遺産に認定されました。

石見

石見神楽をご存じですか？

島根県の西部、かつて石見の国と呼ばれた地方は神楽が盛んです。ここ**邑智郡**でも、神社での奉納神楽だけでなく地域のイベントなどにも神楽がかかせません。**神楽を愛する**たくさんの神楽団体が活発に活動しています。

一口に石見神楽といいますが、「舞」、「調子」、「構成演目」など様ではありません。大別すると、古来の伝統を伝承するものと、演劇的要素を強め新しい感覚を取り入れているところに分かれます。どの神楽も**地域の愛着**に育まれた魅力あふれる神楽です。

ぜひ一度邑智郡に来て、土地の人々と膝をまじえて神楽をご覧ください。一夜の**神楽体験**は、きっとあなたを心地よいあたたかさで包んでくれるでしょう。

神楽

闇をゆるがす、たましいの躍動。



フォトエッセイ

神楽 夜の

旧大和村役場を少し行くと、左手の小高い森の木立の合間から明かりが見える。木々のシルエットが夕闇に浮かび、松尾山八幡宮の社殿に続く石段が明るく照らされている。今日はお宮の秋祭、地元の神楽団の神楽が奉納される。

長い石段を登り、境内に着くと社殿を取り囲むようにア

カガシの大木が何本もそびえている。神楽殿は横手の位置にある。神楽殿の周囲には、しめ縄が張り巡らされ、四季を表す切り紙や御幣が付けられている。天



井には天蓋てんがいが吊られている。神楽が単なる芸能ではなく、神事であることを意識させられる。

見物がだんだん増えてくる。あちこちであいさつが交わされている。家族で来ている人が多い。正面に陣取っている坊主あたまの中学生5人組もいる。高校生らしき男女のグループは少し離れたところで神楽を楽しみにきたのか、久しぶりの集まりなのか。6人ほどで話し込んだり、携帯で電話をしたり……。



神楽は地域の社交の場でもあるのだ。

早くからビデオをセットし、準備万端の人もいる。話を聞くと、神楽といえば、以前は夜通しで朝までだったという。冷えるのでこたつを持ち込んで見物したものらしい。「最近では12時過ぎには終わるけえのー」と寂しそうに一言。演目の構成などが、簡略化されてきたのだろう。今日の演目は、『神迎え』、



星がきらめくころ
人々が集まってくる。

『八幡』、『天の岩戸』、じんりん『塵倫』、『大蛇』の5演目。今年は7年に1度の年季神楽ということで、地域の神様を全てお迎えする『大元神楽』も行われる。が、この大元神楽も略式のものらしい。しかし大元さんという地域の神を祭る風習は残っているのだ。

神楽殿から囃子はやしが聞こえてきた。はじまり、はじまり。どう・太鼓・笛・鉦のリズミカルな音が境内に響く。見物の目が舞台に集まる。天蓋が大きく舞う、見物から大きな拍手。

『八幡』が始まった。

武勇の神、八幡様が異国からやってきた魔王を退治するというストーリー。神楽はこうに神と鬼の合戦舞が多い。そして



●
フォトエッセイ

神を『シン』という。最初に登場するひょっとこのユーモラスな所作に、「うまいぞ」の声がかかる。子どもたちもじっと舞台を見つめている。見物は100人近くに増えている。ゴザを敷いてお酒を飲んでいる人も多い。八幡様の登場に、大きな拍手が湧く。悪魔との戦いの場面はスピーディーな立ち回りが続く。あちこちから声がかかる。舞台と見物が一体となっていく。

舞台にわら蛇が登場する。「神さんが来られるけえ、静かにせえや」と観客の声が聞こえる。7年に1度

だけ舞われる大元神楽だ。神様は神社にだけおられるわけではない。田の脇の道祖神、ご神木いろいろなところにいらっしゃる。地域の神様を全て神楽殿にお迎えし、白装束の神職が舞うのが大元神楽だ。



「今年この月、この日のこのとき、神楽の斎庭で神遊びしよう」。いい声で朗じられる。わら蛇が揺すられ、天蓋も大きく上下に揺すられる。わら蛇に神が乗り移る。

大元神楽が終わると神楽団の人が舞台中央で正座、『花』と呼ばれるご祝儀のお礼をいう。この口上がおもしろい、「またまたたくさん、まーたたくさん」と節を付け、口上を述べながら頭をさげる。これがお礼であり、また催促なのだろう。舞台にのし袋を渡す人が出てくる。そのたびに「またまたたくさん、まーたたくさん」とか、「くだしおかれましては、どっさり、たくさん」とお礼の口上がつづく。隣を見ると、父親の腕の中で、さっきまで動き回っていた子が気持ちよさそうに眠っている。



大きな拍手、「うまいぞ」の声。
ここは神楽を愛する人々の宇宙。



夜も10時。寝ている子をおぶって帰る家族連れ、おばあちゃんに手を引かれて帰る子どももいる。

『天の岩戸』がはじまった。アマテラスが岩戸に隠れ、この世が闇になると

いう神話である。そばの人が親子三代だと指さして教えてくれる。中1の女の子とその父親が舞っている。祖父はどう(大太鼓)をたたく。アマテラスの女の子の舞に「うまい、うまい」の声がかかる。きっと家では家族で練習をしているし、神楽の話題も出るのだろう。このあたりでは子どものころから神楽が肌になじんでいる。

見物の輪から少し離れたところで、パジャマ姿の小学生がひとりでさっきからじっと舞台を見ている。聞いてみると、お囃子の音を聞くと家にじっとしていられないという。いっても家族はあまり興味がなく一人で来たという。神楽好きの遺伝子は、血脈でなく、土地に潜んでいるものらしい。



舞台と観客、 みんな神楽に酔っている。

『塵倫』が始まったのは11時前、周りを見回すと見物の数にはあまり変わりがないようだ。帰る人もいるが、この時間に来る人もいる。

「ジンリンは長いよ。1時間」と隣のおじさんがいう。「5つのところを3つにすれば、短くなる」。観客もよく知っている。

少し肌寒くなってきた。しかし舞手の顔には汗が浮かんでいる。舞には、旧舞と新舞があるらしい。「旧舞がいいけどな」とおじさん。おそらく型というか所作がちがうのだろう。舞台では神と3人の鬼との戦いが繰り広げられている。動きの速い激しい立ち回り。少し地味な色の衣裳が、肩の部分から一瞬で鮮やかな金糸の衣裳に切り替わる。

これを肩切りというそう。見せ場のひとつである。

いよいよ今日最後の出し物。『大蛇』、神話のヤマタノオロチの物語である。舞台も見物も大団円を待ち望む雰囲気が出来上がってきた。舞手と見物に一体感があるのだ。

アシナヅチ、テナヅチの老夫婦がオロチを酔わせるために酒の樽を用意する。テナヅチのお尻をつきだしヒョコヒョコ歩く姿に大爆笑がおきる。心得たものである。今度はア



シナヅチが歌い出した。「♪赤く咲く花、白い花、この世に咲く花 数々あれど〜」。歌謡曲である。神楽に歌謡曲というアドリブがすごい！観客もいっしょに歌い始めるのだ。舞台も観客もこの日の神楽に酔って、心地よい気分になっている。

ここから一気にクライマックス。スサノオとオロチの戦い。オロチの口から火が噴き、最後にスサノオがオロチの首をとりお終いとなる。しばらく拍手が鳴りやまない。声もかかる。その場を去りがたい雰囲気が漂っている。

神楽を見たというよりも神楽体験をしたという方が、しっくりくるような……これが神楽の夜なのだ。



なるほど 石見神楽

I W A M I ・ K A G U R A

1 神楽のそもそも

■原初的な信仰の中から

遠い昔、神は人々の暮らしとともにありました。山に、海に、田に、いたるところに存在する神の言葉を聞き、その言葉を生き方のよりどころとしました。人知のおよばないものに対する素朴な信仰です。神の霊力を授かるため、人々は神々を「神座」に迎え、神人一体の宴を催しました。その宴で行われる神の威力を印象付ける芸能、これが神楽のもととはなれないかといわれています。ちなみに神楽の語源は、神霊を迎える座、「神座(かみくら)」。これが転じて神楽となったといわれています。

神楽は、全国広くその土地土地に伝えられています。形態などからいくつかにその種類を分類できるのですが、いずれも神や精霊をまつる芸能です。



2 石見神楽の特徴

■地域が育む神楽

石見神楽は島根県の西部、石見地方で今も盛んに行われている伝統芸能です。伝統芸能というと細々と命脈が保たれているようなイメージがありますが、石見神楽は違います。たくさんの方の神楽団が活動しています。どの地域にも神楽団体があるといってもいいほどです。秋の祭りには、各地の神社で奉納神楽が舞われるほか、産業祭などのイベントの目玉としても欠かせない存在です。定期的な神楽大会も開催されています。

豪華な衣裳をまとい、凄しい形相の面を付けて、激しい動きで舞う石見神楽。気が舞台に満ち、そのエネルギーを観客が受けとめ、興奮の渦を巻き起こします。

同じ島根県でも東部の出雲地方では、現在の事情は異なります。「佐陀神能」など著名な神楽も伝えられています。石見ほど神楽団体も多くはありません。石見の神楽の盛んなことを、江津市桜江町を拠点に活動した石見神楽研究の第一人者、故・竹内幸夫さんは「地熱」と表現しています。ここ邑智郡と桜江町には、現在36の神楽団体があります。「地熱」が高いのです。そしてこの「地熱」は県外にも伝播し、広島県の県北地方でも石見神楽をルーツとする神楽が盛んに行われています。

■明治にはじまる神楽の変革

演劇的要素も多いとはいえ、まず祭儀ですから、神楽はもともと神職・社人によって舞われていました。ところが明治になると、神社が国家の管理となり、神職演舞禁止令が出て、神職・

社人は手を引くことになりました。しかしそのころの人々にとって、神楽がなくなるのは、大切な楽しみがなくなることでもあり、困ることだったのでしょう。一般庶民の神楽があちこちで群生しました。この神楽は祭儀性の維持より娯楽性重視、つまり鑑賞本位です。演劇性が高く、大衆へのアピールが一番とされました。こうした傾向が現在の石見神楽の大きな流れとなっています。浜田地方では、衣裳や小道具の豪華さをいっそう強調し、演劇的な効果音や視覚的要素も存分に取り入れたショーアップしたスタイルが多いようです。

■古来の神楽が残る邑智郡

しかし、ここ邑智郡では必ずしもそうではありませんでした。古来の神楽伝統が残されてきました。石見神楽の源流ともいわれ、今も大元神の祭儀の伝統を守る大元神楽です。邑智郡の神楽の特色はこの大元神楽を伝承している点にあります。大元神楽は国の重要無形民俗文化財に指定されています。もちろん神楽の盛んな土地柄ですから、ほかにも新しい感覚の広島県北地方の新舞を取り入れた神楽団や浜田地方の影響を受けた神楽団も活発に活動しています。

■六調子と八調子

石見神楽には、大別すると「六調子神楽」と「八調子神楽」の2つの形態があります。鳴り物の調子がゆるい六調子と、早い八調子です。調子が変われば、所作も変わります。一般に石見神楽は、もともとゆっくりしたテンポで優雅に舞う「六調子神楽」だったようです。「八調子神楽」が登場したのは、幕末のころ浜田など海岸部でといわれています。

3 神楽面

■木製から和紙の面に

石見神楽に大きな役割を果たしている神楽面。

神楽面はもともと木彫りのものでしたが、明治時代、人形師の木島仙一によって和紙の軽いお面に改良されました。



六調子からスピーディな八調子への移行には、この動きや

すく、軽い和紙面の登場も大きく関係したようです。

現在の和紙面は、まず粘土で面の原型を彫塑し、乾燥後、柿渋入りの糊で和紙(石見特産の楮半紙)を幾重にも張り合わせ、原型を一つ一つこわしてつくります。一般の面で重ね張りする和紙は20枚、オロチの蛇頭で50枚。硬く、丈夫に仕上がります。表面に胡粉(かき)を塗り、その上から彩色します。胡粉とは、牡蠣ガラの粉末とニカワを混ぜて作った塗料です。



神楽面は浜田・長浜人形の人形師によって手がけられたことから、浜田市の特産品として、飾り面としても人気があります。

4 神楽衣裳

■どれも手づくりの別注品

石見神楽では、神楽の衣装を舞衣まいぎんと呼んでいます。舞衣は神楽の舞い手が神職から一般庶民に変わり、娯楽性が強まるとともに、各神楽団体が互いに華美を競い合うようになりました。その結果、大正年間には早くも金襴を始めとして、しゅす縹子や黒ビロード地に金糸・銀糸を使って昇り竜や唐獅子、鶴などの刺繍が施されるようになりました。こうした贅を極めた衣装は、大変な重量になり、舞子の肩にずっしりと食いこむほどです。その重さに耐えながら、絢爛たる衣装を身にまとして勇壮な立ち回りを演じるところも石見神楽の醍醐味のひとつといえるでしょう。



神楽衣裳の中に「肩切り」と呼ばれるものがあります。肩切りとは、衣裳の肩の部分がはずれるようになっている衣裳のことで、表は比較的地味で、裏面が派手になっています。合戦舞の最中にこれをはずすと、それまでの地味な衣裳が、一瞬にして、絢爛たるものになり、舞台をより華やかにします。この神楽衣裳、既製品があるわけではなく一つ一つが別注品です。注文してから出来上がるまで、1年以上待つことが普通ようです。



5 蛇胴

■石見神楽の花形、長胴のオロチ

石見神楽独特のオロチの胴は、竹と石見の和紙でつくられています。竹でつくった骨に楮半紙を3枚張り合わせ彩色します。最初のうちは蛇腹が柔らかくなじんでいないので、舞手か思うように動かせないこともあります。完成した胴は、伸ばした状態で16メートルもの長さになり、このオロチが一度に何頭も登場し、火を吹く様はすさまじい迫力です。



spotlight

異彩を放つ 大元神楽



◎

大元神楽は地区の祖神である
大元神を祀って行う式年神楽で、
伝承地はおおむね邑智郡の全域です。
地域により伝承度に濃淡はありますが、
共通しているのは神職による神事舞と氏子による奉納舞で
一夜が構成されていることです。
両者は六調子神歌で固く結ばれています。
かつては託綱(藁蛇)につかまって神懸かりすることが、
この神楽の主目的であったとされますが、
近年は、神懸かりを導くプロセスを舞うことを
中核としています。

◎

式年(定められた干支の年)に大元神楽を奉納する氏子神楽団は、
式年以外の年にも同じ保持演目を地元の祭に奉納しています。
これは大元神楽とは呼びません。普通の石見神楽六調子です。

大元神楽は中国5県で5指に数えられている国指定の重要文化財である。

島根県中央部の山間部にある邑智郡一帯に伝承されているもので、いぶし銀のように光る伝承の重みこそ、掛け替えのないよさである。

この神楽はいつでも、どこでも人を集めてやろうというものではない。

また競演大会といったあり方もなされていないオーソドックスなものである。

集落単位に決まった年に行われるもので、それは^{うしみどり}丑巳酉

(4年ごと)とか、^{いぬたつ}戌辰(6年ごと)というように周期が守られている。

神楽は集落全体の喜びであり、30軒程度の小集落で支えているもの、

200軒を超える大集落で支えているものまであり、中身もさまざま

であるが、共通するお祭りのところは「^{わらへび}藁蛇賛歌」である。この祭

りが来ると、新しい藁で作られた七尋半の大きい蛇が捧げられ、神

楽のクライマックスにおいて、舞殿狭しと蛇は神歌とともにうねり舞う。

居合わす人々は、そこに「天かける龍」を重ねて見る。大元神楽だ



などだれもが感ずるひとときである。

今比較的大規模なもの一夜構成について述べるなら、このように神秘的な神事色の濃い舞を中枢に置き、このほかに見ごたえのある儀式舞を据えている。

大きい天蓋てんがいのなかで、小さな9個の天蓋てんがいが降りたり上ったり、空中を生きているように舞う「天蓋」、4人が刀の刃を合わせて、飛んだり潜ったりする「四剣」、神殿に敷くござを捧げ舞い、何十回と飛び跳ねる「ござ舞」、雨の歌にあわせ優雅に舞う「笠の舞」(けん舞ともいう)など、伝承度の高いものである。これらの舞は徳川期をさかのぼる早い時期に芸能化されているところに特色を持つものであり、その昔、行者達が持っていた至難の技を今にみる思いがする。伝承の重み以外の何者でもないといえよう。

そして、そして、眠気を感じさせない面白さもまぶされている。子どもも大人も喜ぶときだ。鬼が出る、狐も出る……………。



低い構え、半身の構えの芸能が土臭い雰囲気たたを湛えている。多く残されている神楽歌とともに、多彩ないろどりに包まれた伝統の神楽なればこそのものである。

秋深まるころ行われる、この大元神楽は、高い山、深い谷から迎えた「大元さん」への親しみをこめた祭りである。夜を徹して笛、太鼓が流れ、御神酒おみきも振る舞われて、舞う人、居合あわす人の一体感が醸し出される。

昨今「伝統芸能」の変質が心配されている時代ともなっているが、大元神楽については、土地との密着性を掲げての伝承活動がものを言っており、心強いものがある。

神楽を見るならその土地に乗り込んでということが、一番の見方であることを申し添えておこう。

日本民俗芸能学会会員 竹内幸夫

■「島根の祭りと伝統芸能」より再録(平成6年島根県観光連盟発行)



石見神楽 鑑賞の手引き



〔演目紹介〕

神楽は素面の採物舞と面を付けた演劇舞で構成されています。『四方拝』、『神降し』などの採物舞は神を招く人の舞、その招きに応える神出現の舞が面神楽です。面神楽には、『岩戸』、『大蛇』など神話等に立脚したものから、中世の語り物や謡曲などを題材とした『鍾馗』、『黒塚』などがあります。最近では創作舞を展開する神楽団もあります。また神楽は、演目が同じでも舞の系統により、また神楽団によりストーリーや演じ方に違いもあります。

ここでは「六調子神楽」を主体として、代表的な12演目を紹介します。

*採物舞：幣や榊、鈴あるいは扇など舞手が手にするものを「採物」といいます。神が好むものを採物に持ち、それを振り回すことで神霊の活動を促す意味をもっています。



しほうはい

四方拝

神楽の一夜のはじまりです。

東青・南赤・西白・北黒の「方位と色」をもつ4人の舞人が、幣と鈴で現れます。東西南北中央の五方を拝し、四隅を堅める儀式を舞います。

つぎの歌ではじまる神歌とともに神楽の境地に入ってゆきましょう。

“幣立つることも高^{たか}天^{あま}原^{がはら}なれば、
集まり^{たまり}給え^{よも}や四方の神々”

*歌は、「幣を立てればここも高天原と同じですから、四方の神々よ、ここにお集まりください」という意味です。

神迎えの儀式舞で、四方を順に巡り、また逆に巡り返して舞殿を淨めます。すべての舞の基本が含まれており、初めての人が神楽舞を始めるときはこの舞から習います。





かみおろ

神降し

“降り給え、降り居の庭には綾をはえ、
錦を並べ御座と踏ましょや”

こんな歌に守られて舞う一人舞です。中でも幣をさばく所作を大切に、ゆったりとしなやかに舞う伝統が大切にされています。

*この演目から始める神楽団もあります。御座（神の座）を清め、神の降臨を願う気品の高い舞。
歌は、「神よ、降りたまえ、神が降りておいでになる場所には、綾を敷き、錦を並べ、そこを神の御座所として踏ませましよう」という意味です。



どうのくち

太鼓口

囃子方（はやし）の面々が舞殿に並び、舞曲を神に奉納します。神歌がろうろうと流れ、大胴、小太鼓、笛、手打ち鉦の四者が、気分を揃えるという大切な一番です。全体が、「荘重」、「優雅」、「快適」の三段で構成されています。

*演目の中で、唯一奏楽だけで演ずる一番で、この演目には、すべての神楽囃子が凝縮されています。



いわと 岩戸

いよいよ面を付けた舞人が現れます。この演目は、岩戸神話を舞うもので昔からの必須演目です。アマテラスが弟の悪態を嘆いてこれから岩戸にこもるとの口上を述べ、静かに舞って下がります。暗闇の場に立つコヤネとフトダマは思案の様を舞い、ウズメを招きます。華麗な舞を見せるウズメ、何事かとそっと覗くアマテラス。そこをタジカラヲが力みなぎる舞を見せて岩戸を開きます。五人五様の舞がこの演目の魅力です。

*アマテラスの弟がスサノオです。太陽の神・アマテラスが天の岩屋にこもったのでこの世は闇となるのです。そのため神々たちが協議をし、天の岩戸の前で神楽を舞い、アマテラスの興味を引き、そのすきに岩戸を押し開こうということになります。策は当たり、岩戸は開かれ、アマテラスを迎え、再び世の中は光を取り戻し、平和になりました。



はちまん 八幡

お待ちかねの「鬼舞」です。神は八幡神、鬼は仏教色の強い第六天悪魔王、宇佐八幡宮(大分県)に祀られている八幡麻呂^{やはたまろ}の武勇伝です。神2鬼1を基本型としています。

客席の声援を受け、数ある鬼舞でにぎわいますが、鬼は力強さの表現として「低い姿勢で舞う」を古来の型としてきました。ゆったりと低く舞う鬼の貴禄を味わいましょう。

*鬼舞は祭神が悪を祓い鎮める神社縁起を芸能化したものを元祖としています。源氏の氏神であった八幡宮は古くから武家の守護神としての信仰を集め、全国の神社のうち3分の1は八幡宮ともいわれています。





しょうき 鍾馗

魔除けをシンボライズしたとされる「茅の輪^ち」は、この演目だけに登場します。サスノオは「我、昔唐国に渡りしとき」で立ち上がり、悪は「大疫神なり」と応戦します。怖い疫病の難から逃れたいとの万人の願いをテーマに、中国の伝説をからませた非凡な台本は、この舞の古さを物語っています。一対一の舞に、鬼舞の原形を見ることができます。



*疫病退散、家内安全を祈る石見神楽の花形演目です。中国の伝説とは、唐の時代、楊貴妃で有名な玄宗皇帝の夢の中に出てきて魔を祓い病を癒した鍾馗という科挙の落第生の故事を指しています。



てんじん 天神

平安のころ。京の高官であった菅原道真が、勢力争いに巻き込まれ、九州の太宰府に追いやられ、そのまま無念の死を迎えた物語はよく知られています。当時道真の怨霊があたりをまたらすという恐ろしい噂が京に広まり、人々は道真を天神として祀りました。異界での天神は正義の象徴として、悪に打ち勝ちますが、この情感はだれにも受け入れられ、神楽舞としても長い生命を保っています。

*学問の神様として知られる天神様(菅原道真)の物語、素朴でわかりやすい古典演目です。





えびす
恵比須

地方の神主が、恵比須を祭る神社にお参りし、里の人からその神社の由来を聞きます。この神は、仁徳厚い神であり、大海原で釣りをされる姿が象徴的であると聞かされているうちに、感きわまり、神の幻影を見る…。最後に恵比須の鯛釣りの場面へと続きます。釣りの場に至るまでの上品な神舞が見どころです。



*この舞は、石見地方では結婚式などのおめでたい席でよく演じられます。鯛釣りの場面だけを取り上げてコミカルに演じる舞い方も多いようです。また恵比須は、西宮神社(兵庫県)の蛭子の宮の祭神を指していましたが、八調子神楽では美保関神社(島根県)の祭神・コトシロヌシとなっています。



じんりん
塵倫

ふたたび鬼舞です。神は八幡神に祀られる足仲津彦命、鬼は海の彼方からやって来たという塵倫魔王。見映えよく、神2鬼2、神3鬼3といった多勢舞を誕生させています。楽しめる鬼舞として人気のある演目です。衣裳や面ばかり注目しがちですが、大勢が合わせながら舞う妙技がポイントです。

*後世に第十四代仲哀天皇と呼ばれる足仲津彦命が、異国から攻めてきた塵輪魔王という鬼を退治し、国を守る物語です。仲哀天皇は日本武尊の第2子といわれています。





くろづか

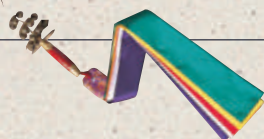
黒塚

山伏が訪れた那須野が原の山中での出会いから、幻想的なストーリーが展開します。「成仏できない」と、せつなく訴える女性。が、実は悪事をはたらくキツネの化身だった……。悪狐は「命の限り」と訴えますが、三浦之介、上総之介という二人の武士によって討ち取られます。

妖気漂う舞台から目からはなせません。



*神に追われて客席まで入ってくるキツネに客席の子どもたちは、鬼よりもこわごわです。また法印さんとお供の強力のアドリブを交えた掛け合いにも注目です。この演目は、新作として「悪狐伝」の台本で舞うところもあります。



おおえやま

大江山

平安中期の武将・源頼光一行が、丹波の国大江山に住む酒呑童子^{しゅてんどうじ}一族を退治する舞です。多勢による華麗な鬼舞は新しい魅力です。山伏姿の神側が、鬼と問答する場面は迫力十分です。



*酒呑童子は、鬼の姿をまねて都や村を荒らし回り、非道の限りを繰り返した盗賊。天皇の命を受けた源頼光が、配下の四天王とともに山伏に姿を変え、天狗から授かった御神酒で酒呑童子を酒宴に誘い、酒に酔わせて退治するという物語です。





おろち

大蛇

たかまがはら

高天原を追われたスサノオノミコトは、出雲の国で老夫婦と娘がなげき悲しんでいるのに出会いました。涙をたずねると、「毎年、大蛇(ヤマタノオロチ)が出没し、7年に7人の娘がさらわれ、今年に残ったこの娘が…」と嘆いています。ミコトは姫を嫁にもらうことを条件に、強い酒を飲ませ、酔った大蛇を大格闘の末、討ち取るというストーリー。



*スサノオとオロチの一大スペクタクル。石見神楽の名を全国にとどかせた演目です。嘆きを救うスサノオの武勇談は、かつて神楽屈指の情感あふれる場面でした。しかし今はオロチの迫力を見どころとする演出が喜ばれるようになりました。時代とともに変わる神楽の一例です。



邑智郡 神楽情報

郡内各所で活躍する神楽団体。
魅力あふれる神楽があなたを待っています。

社中紹介

- 29 長谷同志会
- 30 山中神楽社中
- 31 八戸神楽社中
- 32 市山神友会
- 33 江尾大元神楽保存会
- 34 今田舞子連中
- 35 小田舞子連中
- 36 川戸若連中
- 37 谷住郷神楽社中

- 1 川本神楽団
- 2 三原神楽団
- 3 因原神楽団
- 4 三谷神楽団
- 5 八幡神楽同好会

- 6 千原神楽団
- 7 乙原舞子連中
- 8 忍原地頭所神楽団
- 9 都賀西神楽保存会
- 10 都賀西子ども神楽
- 11 都神楽団

- | | |
|------------|------------|
| 12 雪田神楽団 | 21 中野大元神楽団 |
| 13 口羽神楽団 | 22 矢上大元神楽団 |
| 14 楯尾神楽団 | 23 日和大元神楽団 |
| 15 田所神楽保存会 | 24 吉原大元神楽団 |
| 16 出羽神楽団 | 25 福原神楽団 |
| 17 出羽子ども神楽 | 26 春日神楽団 |
| 18 美穂神楽団 | 27 山之内神楽団 |
| 19 高原神楽団 | 28 桜井神楽団 |
| 20 井原神楽団 | |



*平成16年10月1日、桜江町は江津市と合併しましたが、同じ神楽文化をもつエリアであり、本ガイドブックでは「邑智の神楽」として掲載しています。

1	川本神楽団	川本町大字木路原		子ども
2	三原神楽団	川本町大字三原	大元	
3	因原神楽団	川本町大字因原		
4	三谷神楽団	川本町大字湯谷	大元	
5	八幡神楽同好会	川本町大字因原		
6	千原神楽団	美郷町千原		
7	乙原舞子連中	美郷町乙原	大元	
8	忍原地頭所神楽団	美郷町地頭所		
9	都賀西神楽保存会	美郷町都賀西		
10	都賀西子ども神楽	美郷町都賀西		子ども
11	都神楽団	美郷町都賀行		
12	雪田神楽団	邑南町雪田		
13	口羽神楽団	邑南町下口羽		
14	楯尾神楽団	邑南町市木	大元	子ども
15	田所神楽保存会	邑南町下田所	大元	
16	出羽神楽団	邑南町出羽		
17	出羽子ども神楽	邑南町出羽		子ども
18	美穂神楽団	邑南町久喜		
19	高原神楽団	邑南町高見		
20	井原神楽団	邑南町井原	大元	
21	中野大元神楽団	邑南町中野	大元	子ども
22	矢上大元神楽団	邑南町矢上	大元	子ども

23	日和大元神楽団	邑南町日和	大元	子ども
24	吉原大元神楽団	邑南町日貫	大元	子ども
25	福原神楽団	邑南町日貫	大元	子ども
26	春日神楽団	邑南町日貫	大元	子ども
27	山之内神楽団	邑南町日貫	大元	子ども
28	桜井神楽団	邑南町日貫	大元	子ども
29	長谷同志会	江津市桜江町長谷	大元	子ども
30	山中神楽社中	江津市桜江町山中	大元	子ども
31	八戸神楽社中	江津市桜江町八戸	大元	子ども
32	市山神友会	江津市桜江町市山	大元	子ども
33	江尾大元神楽保存会	江津市桜江町江尾	大元	
34	今田舞子連中	江津市桜江町今田	大元	子ども
35	小田舞子連中	江津市桜江町小田	大元	
36	川戸若連中	江津市桜江町川戸	大元	子ども
37	谷住郷神楽社中	江津市桜江町谷住郷		子ども

大元……大元神楽伝承保存会加盟団体
子ども……子ども神楽あり

■お問い合わせ先

川本町観光協会	TEL 0855-74-2345
美郷町観光協会	TEL 0855-75-1330
邑南町商工観光課	TEL 0855-95-2565
江津市役所 社会教育課	TEL 0855-52-2501

神社奉納神楽一覧表

■神社名	■ところ	■とき
① 弓ヶ峯八幡宮	川本町川本	11月初旬
② 因原八幡宮	川本町因原	10月初旬
③ 三原八幡宮	川本町南佐木	10月第4土曜日
④ 武明八幡宮	川本町三原	11月 2日
⑤ 岩根山八幡宮	川本町湯谷	10月21日
⑥ 三俣八幡宮	川本町三俣	11月 2日
⑦ 三嶋神社	川本町川下	11月 2日
⑧ 地頭所八幡宮	美郷町地頭所	11月初旬
⑨ 乙原八幡宮	美郷町乙原	11月初旬
⑩ 吾郷天津神社	美郷町吾郷	10月第4土曜日
⑪ 千原八幡宮	美郷町千原	10月第4土曜日
⑫ 九日市王子神社	美郷町九日市	11月初旬 *不定期
⑬ 酒谷八幡宮	美郷町酒谷	11月 2日
⑭ 松尾山八幡宮	美郷町都賀本郷	10月第3土曜日
⑮ 小尾山八幡宮	美郷町都賀西	10月第3金曜日
⑯ 上田八幡宮	邑南町上田	10月 4日
⑰ 宮尾山八幡宮	邑南町下口羽	10月 4日
⑱ 賀茂神社	邑南町阿須那	5月21日
⑲ 榎尾八幡宮	邑南町市木	10月上旬
⑳ 亀谷山八幡宮	邑南町下亀谷	9月22日
㉑ 賀茂神社	邑南町中野	10月10日 *式年の年のみ
㉒ 折居神社	邑南町井原	10月28日 *式年の年のみ
㉓ 諏訪神社	邑南町矢上	10月24日
㉔ 櫻井太詔刀命神社	邑南町日和	10月16日
㉕ 金刀比羅神社	邑南町日和	7月10日
㉖ 大原神社	邑南町日貫	10月13日
㉗ 見水山八幡宮	江津市桜江町谷住郷	10月初旬
㉘ 太詔刀命神社	江津市桜江町川戸	10月初旬

■神社名	■ところ	■とき
㉙ 園幡山八幡宮	江津市桜江町小田	10月初旬
㊀ 大山祇命神社	江津市桜江町今田	10月初旬
㊁ 市山飯尾山八幡宮	江津市桜江町市山	10月初旬
㊂ 江尾大元神社	江津市桜江町江尾	10月初旬
㊃ 長谷瓦山神社	江津市桜江町長谷	10月初旬
㊄ 八戸八幡宮	江津市桜江町八戸	10月初旬
㊅ 山中八幡宮	江津市桜江町山中	10月初旬

※この一覧表は、神楽団がお祭りに神楽を奉納している神社を掲載しています。
※神社の位置は、巻末の神楽マップに掲載しています。

*大元神楽式年一覧表

		十二支周期による式年表示（●印）											
伝承地		子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
川本町	三原		●							●			
	三原武明		●										
	湯谷					●						●	
	三俣				●						●		
邑南町	市木				●				●				●
	田所	●				●				●			
	矢上		●				●				●		
	井原		●				●				●		
	中野	●				●				●			
	日貫		●				●				●		
	日和			●			●			●			●
桜江町 (江津市)	市山				●							●	
	江尾		●						●				
	小田					●							
	川戸							●					

※大元神楽伝承保存会加盟団体奉納神楽関係
(保存会には上記のほか、浜田市旭町下市木地区の神楽団も加盟しています。)

*式年通りに行われない場合もあります。見学の際は、P38の問い合わせ先にご確認ください。

KAGURA MAP



〔邑智郡 神楽マップ〕

●の番号は奉納神楽神社(神社名はP39-40参照)

凡例

- 5.5m以上 5.5m未満 国道
- 5.5m以上 5.5m未満 主要地方道
- 5.5m以上 5.5m未満 その他の道路
- 高速道路
- JR
- 役場



広島から車で

美郷町120km (150分)
川本町100km (120分)
邑南町80km (60分/高速利用)

